



信仰と官能のあいだで

新免光比呂
しんめんみつひろ

民博 超域フィールド科学研究部

ふたつの宗教集团的行動

新型コロナウイルスの影響は世界各地におよんだが、そのなかで際立つふたつの集団行動があった。ひとつはプロテスタントが主流であるアメリカ合衆国でロックダウンの解除を求めて銃をもった住民たちがデモをおこなったこと、もうひとつはローマカトリック教皇お膝元のイタリアで通常業務への復帰に反対して労働者のデモがおこなわれたことである。どちらもありふれた海外ニュースであるが、そこからはプロテスタントとカトリックの文化的影響による対照的な性格が読みとれる。コロナの危険性があるながらも個人の自由を主張するプロテスタントと共同体の成員の安全を優先するカトリックの違いである。

美食は罪か、人生の醍醐味か

さて、映画「バベットの晩餐会」は、デンマークの片田舎に住む信心深い人びとの宗教共同体（ある牧師が創始し、その娘である姉妹が継承）にバリの革命（一八四八年）を逃れた天才料理人がたどり着き、心の静謐を得ることができた恩返しに宝くじで手に入れた一万フランすべてを使って料理を振る舞うといったストーリーである。映画の細部はよくできていて、信心深くも狷介な老人たちを描写するたくまざるユーモア



フォアグラとウズラのバイ詰めトリュフソース添え。バベットが姉妹にふるまったメニューのひとつ
(Photo : Mogens Engelund, 2008, Wikimedia Commons, CC BY-SA 3.0)

と北国の自然環境の厳しさを、宗教的な家族の葛藤、愛の喜びと諦観が映像的表現によって見事に描かれる。ローマ教皇も愛した映画であるという風評からは、キリスト教における信仰（禁欲）と官能のせめぎあいというテーマが浮かび上がる。

映画の舞台であるデンマークは、ルター、カルヴァン、メランヒトンなどに主導されたキリスト教改革運動の流れをひき、聖書の重視、教会における伝承の権

「バベットの晩餐会」

原題：Babettes gæstebud

1987年/デンマーク/デンマーク語・スウェーデン語・フランス語/104分

監督・脚本：ガブリエル・アクセル

出演：ステファヌ・オードラン、ピアギッテ・フェザースピール、ボディル・キェアほか

作品のロケ地となったモーロブ教会。ユトランド半島北部の海沿いに建つこの教会は、海岸浸食の影響を受け、2016年には撤去された(2004年)
(Photo : Wikimedia Commons, CC BY-SA 3.0)



威と聖職者階層の否定などの特徴をもつルター派プロテスタントの地域である。映画では神への賛美と清貧と禁欲が強調されている。貧しい食事に甘んじ、質素な生活を律する人びと。生の喜びより神を称えることが重視される。とはいえ、どんなに素晴らしい信仰をもっている、人は疑い深く、狭量で、悲観的でありうる。過去の誘惑と詐欺をめぐって諍う信者を目にして姉妹も深い悲しみと亡き牧師への想いにとられる。そこに一万フランと人生をかけた芸術的な料理が投げ込まれるのだ。革命ですべてを失ったバベットが渾身の力を込めて料理した品々は、芸術的な、洗練された料理による味覚の官能的喜びによって、老いを迎え、疑心暗鬼で閉ざされた人びとの心を開き、一時的ではあるが集団の共同性を開示する。またかつて姉妹への愛を諦め、出世の道を歩んだものの、その虚しさに疲れた將軍も過去の愛の思い出とともに料理で生の充溢を知る。

神の意志はどこに？

そういえば映画では音楽も

強調されていた。主人公である姉妹はつねに歌によって神を賛美する。かつて姉妹を愛したバリの音楽家もまた肉体だけでなく、歌を通して超越的なものを求める。老いを迎えたとき、彼はバベットを姉妹へ紹介する手紙を書きつつ、虚しさの果てに歌を超える存在に気づくのだ。あるいは、共同性に目覚めた信者たちは、会食後に満天の星の下で輪になって手をつなぎ、ともに歌う。そもそも改革者の一人であるルターは音楽を愛し、音楽によって神を称え、神の喜びを感じたという。映画は人間の信仰と官能について原理的な問いを投げかけるが、映像を観る限り官能もまた信仰と人生を味わい深いものにするようだ。

余談ではあるが、原作者カレン・ブリクセンは映画「愛と哀しみの果て」の原作者でもある。こちらの映画では、デンマーク貴族夫妻がアフリカにわたり、植民地経営者の一員として生きる姿が描かれる。妻は夫の浮気、夫からうつされた梅毒、夫婦生活への懐疑などから冒険家と恋におち、やがて生き直すことを試みるのだが、冒険家の死によって故国に帰る。問題はブリクセンもまた白人の植民地経営者であったことである。彼女の白人至上主義、人種的優越意識、倫理観の欠如がポストコロナの論客から批判されている。実際にどうであったのか知ることは難しく、性急にブリクセン批判に加わることはできないが、「バベットの晩餐会」で示された静謐で味わい深い宗教共同体と料理の芸術性の一方で、白人優越の人種的差別を内包したヨーロッパ人による植民地経営に参加していたブリクセンの一面も忘れることはできない。